

## 第 11 回全国和牛能力共進会 - 北海道の大躍進 -

雑誌ニューカントリー11月号掲載予定 - 抜粋 -

家畜登録改良部 総括指導官 山本 裕介

### 全共の目的

「高めよう生産力 伝えよう和牛力 明日へつなぐ和牛生産」をテーマに、第 11 回全国和牛能力共進会（全共）が 9 月 7 日～11 日の 5 日間、宮城県で開催され、39 道府県から種牛の部 330 頭・肉牛の部 183 頭の精鋭が集まった。

北海道では第 11 回全共北海道対策本部を設置し、過去最多となる種牛 15 頭・肉牛 8 頭が出品された。

1966 年の岡山大会に始まった各全共の特徴は、それぞれの時代における和牛生産と改良上の重要課題を反映した出品区を設けることで、日常の登録事業を通じた改良成果の検証と併せて、次世代を託せる素材の選抜と展示により、今後の和牛改良の方向性を明示することにある。

宮城全共では前述テーマの下、生産効率の向上に向けた繁殖能力の改良と総合的に能力の高い雌牛基盤の整備、遺伝的多様性の維持・拡大、「おいしい和牛肉」の効率的生産という課題を掲げた。

### 北海道出品牛の結果

北海道からは第 4 区を除く 8 つの出品区に出品した。

前回（12 年）の長崎全共では半数近くが道外の種雄牛の産子であったが、今回は 2 頭を除き道内種雄牛である「勝早桜 5」「花国安福」「北平安」「北翔王」の産子を出品。北海道の遺伝資源をアピールし、和牛産地としての北海道の認知度を上げることを目指した。

その結果、5 つの出品区で優等賞を獲得した。また、第 1、2、5、6、7 区で前回より順位を上げた。さらに府県別の成績を競う出品団体表彰では初めて 6 位入賞を果たした。

過去の全共では、第 8 回岐阜全共を除き、優等賞 6 席以上を獲得した出品区は 1 つだけであることから、北海道全体としては大躍進したといえる。北海道の存在感を大いに全国に示せたのではないだろうか。

一方で課題も残る。種牛の部では、「北海道らしい牛」として発育良く体積豊かな牛を選抜したが、種牛能力が重視されていく中で、体積を維持しつついかに種牛性（均称、品位、資質等）を備えるかが課題といえる。

肉牛の部では、発育・増体能力は遜色ないが、脂肪量のコントロールに課題を残した。

### これから

今回の宮城全共でも、鹿児島県、宮崎県、大分県の 3 強が上位を席卷し、その壁は厚いことを認識させられた。しかしながら、北海道は地域の特色を生かした出品牛たちで挑み、堂々の団体 6 位入賞を獲得。目標である「日本一の和牛産地」への道を着実に歩んでいる。出場した牛の出品者（引き手）の年齢も他府県より圧倒的に若く、次回全共につながっていくことだろう。

本協会としては、今後も北海道の気候風土に適した「北海道和牛」の確立に向けた改良方針を見失うことなく、生産者・関係者一丸となって登録業務や改良・生産振興業務に励んでいく。それが、次回 22 年鹿児島全共での上位入賞への道を開くと考えている。